

「萩焼の伝統技法」の一例

時代 時代の革新的技法から生まれ、萩伝統の技法のひとつになったもの

インターネット萩焼の伝統技法検索より整理

萩焼のはじまりは、文禄・慶長の役(1592～1597)で連れ帰られた朝鮮李朝の陶工によって萩城下の松本中之倉で開窯せられた萩藩の御用窯。

現在 萩焼の陶芸家・窯元は、萩焼発祥の萩・長門深川から山口・防府そして県内各地に広がっている。

そして、萩焼 380 年の伝統の中から、伝統工芸、現代工芸、前衛と多彩なジャンルの中で活動し、人間国宝、芸術院会員、前衛作家等々 数多くの陶芸家を輩出しています。

- ・ **梅花皮** 井戸茶碗に見られる釉薬の割れ目の部分を出す萩焼の技の一つ
梅の古木に見られる木の膚がカサカサしている状態に似たもので、釉が粒状に固まったものをいい、これは釉が溶けそうになって縮れを起こした現象で、この 延びた風情が井戸茶碗の大きな特色ともなっている。
- ・ **御本手** ホタル・モミジとも呼ばれる 砂や化粧がけによってオレンジ色の斑点を作ったもの
- ・ **刷毛目** 刷毛の掛け方で、様々な模様になる。刷毛目を消さないように化粧がけをして焼成を行う手法
- ・ **高台** 茶碗の胴や腰をのせている丸い輪の全体のこと。
高台には、丸い輪をつかって本体につけた「つけ高台」と、本体の土をへらで削ってつくった「削り高台」がある。
また、高台の輪の一部をかきとったものを切り高台、割り高台という。
萩焼には、この割り高台が多く用いられている。
- ・ **焼締** 釉薬を使わずに焼成する方法。ワラに塩化ナトリウムを染み込ませ、器に巻きつけ焼成。
- ・ **貫入** 萩焼をはじめ粗陶器と呼ばれる土ものに比較的よく見受けられる釉表面のヒビのこと
窯出しの冷却の際、素地と釉地釉薬の膨張率と収縮差の違いによっておこる。
- ・ **窯変** 窯の中で炎に触れた部分の釉調が変化すること。



萩割高台茶碗 江戸時代前期



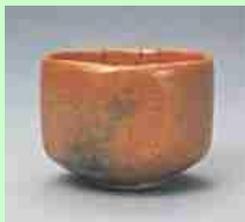
萩茶碗 江戸時代前期



萩十字文割儀形鉢 江戸時代前期



萩編笠水指 三輪休雪 1973年



萩赤楽茶碗(1703)

三輪休雪(初代)



萩井戸形茶碗(江戸時代前期)

作者不詳



萩割高台茶碗(1974)

三輪休和(10代三輪休雪)